

帰依住職の

イツペー

チビラーサン

▶11

十六日祭

— 沖縄の年中行事 —

用のお飾りを取り終えることができませんので、それからグソーのお正月をお祝いしたことから、ジュウルクニチの行事が始まったと考える人たちもいます。

沖縄県内各地で、このジュウルクニチを執り行いますが、その内容はムートウ

（旧正月）をイチミがお祝いし、一月十五日にお正月

ヤ（本家）や自宅のお仏壇にお参りすることもあれば、お墓参りをする場合もあります。それぞれ地域というより、家庭の単位で異なった形式での年中行事となることもあるようです。

にも生き続けていてくれますようにとの思いで、ジュウルクニチを敬っていきますと、一般的に難しいと言われている沖縄の年中行事も、私たちにとって、とても身近な、そして語り継いでいかなければならない、大切な沖縄の心であることに気づくことでしよう。

# グソーのお正月を祝う

ハイサイ！ 今回は、沖縄の年中行事を代表するものとして、十六日祭（ジュウルクニチ）を紹介したいと思います。沖縄では、

生きている私たちのことを生身（イチミ）と言い、亡くなられた人たちがその世界のことを後生（クソー）と言います。クソーは、本土では「ごしよう」と呼ばれ、多くの年中行事や宗教の共通の考え方となっています。

今の新暦（しんれき）という太陽の暦とは異なり、昔は旧暦（こむかし）という月の暦を基本にして、年中行事を執り行っていたことは、前にもお話ししたと思います。旧暦の一月一日

（旧正月）をイチミがお祝いし、一月十五日にお正月



るものを、新十六日祭（ミ）ージュウルクニチ・アラジユウルクニチと呼びます。この時は、重箱と呼ばれる四角い箱の中に、お餅（もち）や白豚肉（さしほし）、三枚肉と呼ばれる蒲鉾（かまぼこ）、合計で奇数となる惣菜（そうざい）を話めて、お仏壇やお墓にお供えする地域・家庭もあります。「一年の計は元旦（もとぞの）にあり」。亡くなられた人たちの初めてのお正月が寂しくないように、またいつまでも私たちの心の中

今回で、私のエッセーは終わりです。どの年中行事にも言えることですが、お供えしたものを下げるときは、「ウサンデーサビラ（お下げしましょうね）」の言葉を、まごころを込めて口に出して下さいね。神様や仏様やご先祖様は、私たちの目には見えませんが、いつも見守って下さっているのですからね。

（帰依龍照 球陽寺住職、タイムスカルチャーセンター

「基礎から学ぶ沖縄の年中行事」講師） おわり